

雲仙・島原史の多文化研究 II

—自然が育んだ雲仙山岳信仰の源流と現在・未来—

山崎 功 (研究紹介)¹, 和田 奈緒², Peemmaphat BUARAPHA², 出口智佳子³

Progress Report 2018 by Women & Young Researchers:
Multi-cultural Approach to Unzen-Shimabara
History Focusing on the Mountain Worship and Regional Development
from Asian Perspective

Isao YAMAZAKI (adviser), Nao WADA, Peemmaphat BUARAPHA, Chikako DEGUCHI

要 旨

本研究報告では、佐賀・九州の特色ある芸術・工芸・歴史文化の背景にある文化的重層性・多様性を読み解き、佐賀の歴史文化を広く九州・アジア・世界へと繋げる女性・若手研究者の取組成果の一部を紹介する。中間報告として、九州の自然と歴史に根差した雲仙・島原の山岳信仰を広くアジア地域史の視点から見直し、世界史とのつながりで読み解く。タイ北部ランナーと雲仙島原の「信仰」の比較史、近世「家紋」意匠をめぐる地域的特色、さらにこうした歴史文化が近現代に如何に繋がっているかを「観光」・「地域振興」をキーワードに明らかにしようとしている。

本研究の背景紹介

本研究報告では、芸術地域デザイン学部の特徴・佐賀の歴史文化を活かした女性・若手研究者自主研究グループ（大学院地域デザイン研究科在籍生ら）による、粗削りながらもさらなる研究深化が期待される意欲的な中間成果の一端が紹介されている。本学教員の助言支援のもと、研究成果をとりまとめつつある。

うちひとつは佐賀の歴史・文化との比較視点を踏まえた「外来文化の受容と変容—時代を超える文化多様性」（研究代表地域デザイン研究科和田奈緒、佐賀大学芸術学系若手・女性研究者支援事業採択）、ふたつめには佐賀との比較視点を踏まえた「島原・雲仙史の多文化研究—交易と信仰から地域振興の時代へ」（外部助成研究代表出口智佳子（「島原半島ジオパーク学術研究助成」を受けている）がある。これらの研究企画は佐賀の特色ある芸術・工芸・歴史文化を多角的に明らかにすること、背景にある文化的重層

¹ 佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域デザインコース
Course of Regional Design, Faculty of Art & Regional Design, Saga University

² 佐賀大学大学院地域デザイン研究科修士課程1年
M. A. Program student, Graduate School of Regional Design, Saga University

³ 佐賀大学美術館（学務部教務課）
Saga University Art Museum

性・多様性を読み解くことをめざし、美術史、アジア史、地域研究分野、芸術表現等を専門とする女性・若手研究者が集い、佐賀・九州の歴史文化を広く九州・アジア・世界へと繋げる若手研究者の相互連携的取組みである。本企画は2017年度より試行開始、意欲的なパイロット研究として取り組みを続けているのが雲仙・島原史への多文化アプローチである。¹

雲仙・島原には、豊かで特色ある自然環境に由来する土着文化と九州地域間の摩擦と交流、さらにアジア・ヨーロッパ外来文化の融合と相克の歴史が見出されるといわれる。こうした雲仙・島原の歴史文化を読み解くキーワードとして、「信仰」、「交易」、そして近現代につながる「観光」、「地域振興」を挙げることができる。

第1部では、日本各地の自然風土・地域固有の歴史文化として継承されてきた意匠としての家紋に着目した若手研究の試みについて紹介している。2020年の東京オリンピック、2025年の大阪万博を控え、日本の歴史や伝統文化に対する国内外の関心が高まっている。元来公家や武家の間で他家と自らの一門を識別する標識意匠として発達してきた家紋は、近世以降町人文化の開花とともにその時々歌舞伎などの芸能、南蛮渡来に代表される風俗流行を取り入れながら発達してきたといわれる。和田奈緒は自らの研究関心として近世以降多様な階層の人々の間で愛好された「遊び紋」に着目している。「遊び紋」自体はその時々流行り廃りのなかで消えてしまったものもあるが、長い歴史のなかで花鳥風月を愛でてきた日本の家紋の特色として、身近な雑草までもモチーフとしてとりいれてきたことが指摘されている。とくに稲垣栄洋は、日本の家紋モチーフとして、カタバミや田んぼの水草として知られるオモダカ、ナズナ（ぺんぺん草）などがあることを指摘している。これらやっかいな雑草のモチーフは、「抜かれても抜かれても、しぶとく種を残して広がっていく」強さを見出した戦国武将に好まれたという。²やがて近世以降、家の存続と子孫繁栄を願う幅広い人々の間に定着していったようである。本稿で和田は特に雲仙島原地域の自然風土・産物を反映した特徴的な家紋意匠として「丁子紋」、「茶の実紋」に注目するにいたっている。丁子（クローブ）は大航海時代口之津に南蛮から渡来した重要な交易品に由来するともいわれる。また茶の実紋は雲仙島原名産のお茶の花弁に由来するのではないかという仮説のもと研究着手の一端を紹介している。和田は、近世以降雲仙島原の人々の間に受け継がれてきた家紋の拡がりを考察するにあたって、歴史資料としての家紋が刻まれた墓石に着目している。関根達人によれば、江戸時代には大名から庶民に至るまで多様な階層の人々が、石に自らの想いや願いを刻むことが流行し、墓石から狛犬までさまざまな石造物がつくられたという。歴史に名を残さなかった圧倒的多数の江戸時代を生きた人々にとって、墓石はこの世に生を受けた唯一の証であり、近年では身近な近世資料としての重要性に着目した江戸時代研究がすすめられている。ただし関根氏も述べるように、墓石調査にあたっては先祖・故人に対する敬意を持ち、現代につながる個人の尊厳、人権にも配慮した謙虚な研究姿勢で調査に臨むことを、本研究メンバー全員で改めて確認させていただきたい。³

第2部では、タイ北部の古都チェンマイにある山岳聖地であり、ドイ・ステープ・プイ国立公園の中核、観光スポットとしても知られるドイ・ステープ寺院（Wat Phrathat Doi Suthep ワット・プラタート・ドイ・ステープ）のフィールド調査成果が紹介されている。その地域固有の自然風土・歴史文化に培われた山岳信仰と国立公園振興の事例研究は、雲仙・島原の自然と伝統文化をアジア的視点から比較することにもつながり、今後興味深い成果が期待されるのではないと思われる。タイからの留学生として近現代日

¹ 2017年企画の中間成果として、山崎 功 (助言) 東加代子 Ta Thi Huyen 清川千穂 田中佑実 「雲仙・島原史の多文化研究——交易と信仰から地域振興の時代へ」『佐賀大学芸術地域デザイン学部研究論文集』第1号 2018年

² 稲垣栄洋『雑草が教えてくれた日本文化史——したたかな民族性の由来——』エイアンドエフ 2017年 214-216ページ

³ 関根達人『墓石が語る江戸時代——大名・庶民の墓事情——』吉川弘文館 2018年 島原地域の歴史性を踏まえた墓碑の悉皆的調査成果のひとつとしては大石一久編『日本キリシタン墓碑総覧——南島原市世界遺産地域調査報告書』長崎文献社 2012年がある。

タイ関係史、日タイ相互イメージの考察に取り組んでいる Peemmaphat は、自らもゆかりのあるタイ北部の多様なエスニシティ構成、ランナーの人々の変わりつつある山岳精霊信仰と自立に向けた観光振興などにも関心を持って調査をしている。Peemmaphat がケーススタディとして取り組むドイ・ステープ寺院の起源は、ミャンマー、ラオス、中国、さらにカンボジアなどと境を接する山岳地域の自然や歴史に根差したランナー精霊信仰とヒンドゥー、仏教、中国神仙思想や暦法などの多様な習合として特色づけられるという。学際的なフィールドワークと多様な史資料調査を両輪とする戦後東南アジア研究の深まりは、多くの成果をもたらしている。なかでもミャンマー（ビルマ）やタイの農民が、ヒンドゥー諸神、地域の精霊祭祀や国家の政治権力との関わりのなかで、上座部仏教をどのように実践してきたか、あるいは政治制度としての仏教と地域の人々の信仰実践との相克（受容しつつも緊張や対抗もある）が1960年代以降明らかになってきた。⁴本論がとりあげる北部タイ・ランナー地域は、歴史的には中国、ミャンマー、シャム（タイ）の強い影響を受けながらチェンマイ、ハリブンチャイ、ランナーなどの独自の王朝が盛衰し、19世紀以降はラタナコーシン朝のタイに編入、タイ仏教の強い影響を受けてきた。1960年代以降顕著となった共産主義の波及で不安定化した北部タイの問題はタイ政府にとっての重要課題であった。人々の社会経済的不満を解消し、タイ仏教を普及させて国民統合（タイ人化）をすすめることが求められた。急速な欧米型の国家経済開発計画を強力にすすめたことで、伝統回帰を指向するナショナリズムの反発も生じた。仏教に根ざしたタイ独自の「もうひとつの発展」が1970年代以降試みられているという。その「もうひとつの発展」の実践に従事したのが「開発僧」と呼ばれる地域社会に入っていった僧侶たちである。しかしながらそこで問いかけられたのは、タイ人化を前面に打ち出すことで起こるランナーの人々の中央に対する反発や緊張である。本稿第2部で紹介される高僧クルーバー・シーウィチャイ（1878-1938）の言説は、タイ中央による強引な「タイ化」批判としてときに鋭く登場することがあるという。同師は北部タイ地域発の「開発僧」の先駆けとして今もランナーの人々に崇敬され、今日「新クルーバー（高僧）派」としてひとつの宗派を形成している。⁵新クルーバー派の特徴は、高僧シーウィチャイの行いを習い、地域社会を信仰実践を通じて発展させることであるという。本稿は先行研究を踏まえつつ、信仰観光の側面にも着目したドイ・ステープのフィールドワークとして今後の発展が期待されるものとなっている。また本稿ではランナーにおけるヤクシャやモムなどのヒンドゥー諸神・仏教逸話が紹介されている。これらは日本に伝わった夜叉、鵺などの伝承などとも符合するところが示唆されるものであり、アジア広域の信仰世界のひろがりを考えるきっかけを与えてくれるものとなっている。

第3部では、16世紀島原に割拠した有馬氏によるキリスト教保護政策と満明寺の破壊による修験道とのあつれき衰退など、主に根井浄の重要な先行研究を踏まえて雲仙島原の信仰の歴史を紹介している。本稿とのかかわりのなかで注目すべきは、近年解明のすすむ「キリシタン・ベルト」と「硫黄の道」が結ぶ世界史的な規模での雲仙島原＝九州＝アジア史の拡がりである。川村信三は、16世紀九州の政治・宗教を動態的にとらえる地図としてキリシタン・ベルトを提唱している。川村によれば、大友宗麟領ないしは影響下にある（豊後・肥後・天草）地域、大村純忠領（長崎周辺）、有馬晴信領（島原半島）にまで連なるキリシタンが密集して分布するベルト地帯である。北の龍造寺領と南の薩摩領にはさまれ、ヨーロッパ宣教師たちが長崎と大分を行き来した街道ルートとも重なるという。このベルトは豊後から瀬戸内を通り近畿へ、長崎からはマカオ、ゴア、欧州へと世界史的規模でつながっていたことも示唆されている。⁶2018年

⁴ 東北タイの地域・宗教社会誌の代表的な研究のひとつとしては林行雄『ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌——』京都大学学術出版会 2000年

⁵ 泉 経武『「開発」のなかの仏教僧侶と社会活動』桜井義秀、濱田陽編著『アジアの宗教とソーシャル・キャピタル』明石書店 2012年 259-284ページ

⁶ 根井浄『修験道とキリシタン』東京堂 1988年。川村信三『「キリシタン・ベルト」のアウトライン』大石一久編『日本キリシタン墓碑総覧——南島原市世界遺産地域調査報告書』長崎文献社 2012年 501-507ページ。

の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界遺産登録を受け、禁教期以降のキリシタン信仰についての理解関心は大きくなっている。一方、九州で独自の発展と衰退を繰り返した修験道に対する関心もまた、国際的に高まりつつあるといわれる。⁷神田高士は、根井や川村の先行成果をふまえ、キリシタン対修験道の対立を、硫黄を産する禁忌地・聖地としての雲仙満明寺、豊後久住山法華院の修験道信仰との関わりで把握することを示唆提言された。⁸中世以降、硫黄の輸出品としての重要性が高まるなかで、これを産出する雲仙、久住の温泉支配権をめぐる聖俗諸勢力の抗争盛衰は、アジア史・世界史規模での九州地域の刺激的な特色と重要性を示すものとなっている。

以下、本研究中間進捗を一部紹介させていただいた。和田、Peemmaphat、出口、調整担当津田の引き続きの研究進展に期待したい。

⁷ たとえば Allan G. Grappard, *Mountain Mandalas: Shugendo in Kyusyu*, London: Bloomsbury, 2016.

⁸ 神田高士「硫黄の道」大石一久編『日本キリシタン墓碑総覧——南島原市世界遺産地域調査報告書』長崎文献社 2012年 571-533ページ

第1部 雲仙・島原と家紋文化

和田 奈緒

・はじめに

今回著者は、家紋を用いて雲仙・島原地域の歴史や文化について掘り下げていこうと考えた。普段家紋や文様に関する研究をしていることもあるのだが、今回は「雲仙プラン100」の影響が大きい。雲仙プラン100⁹とは、雲仙地域の国立公園指定100周年に向け策定された、地域再生と国立公園再生のための将来ビジョンと、そのための具体的行動計画を示した中長期の地域再生行動計画のことで、専門家・行政機関・地域関係者からなる「雲仙プラン100策定委員会」の設置と、雲仙・島原半島の住民からなるワーキンググループを組織し定例会を行い、活発に議論を行うものである。地域が抱える課題に目を向けるとともに、実施主体と達成目標明らかにした行動計画の作成、それを推進するための体制づくりを行ったもので、雲仙地域と島原半島の強みと課題を整理し考え出された「つながる」というキーワードを基本理念として掲げている。

委員会やワーキンググループでの議論のほか、地域住民をはじめとした、2000人を超える人々へのアンケートによって浮かび上がった地域の課題と強みは、非常によく整理されており、住民たちが誇りに思っていること、発信していきたいことがよくわかるものとなっている。しかし、挙げられた意見を見てみると、「観光地として」「国立公園として」の雲仙・島原地域に目が向けられており、人々が暮らしている「地元としての」地域の強みや誇りの主張が希薄であるように感じた。地域の再生や再興を考える際、地域が持つ資源を整理することももちろん大事だが、歴史や暮らしに目を向けることも重要なポイントであると考えている。

雲仙プラン100の「つながる」という基本理念に基づき、地域が持つ歴史を掘り下げることや、地域再興について考えた際、今を生きる私たちと、過去を生きた先祖たちをつなげる印であり、昔から変わらない形で墓石に姿が刻まれている「家紋」を用いようと考えた。

・雲仙・島原地域と家紋について

雲仙地域・島原半島の家紋を調査するにあたり、調査によってこの地域の家紋には地域性がみられるのではないかと仮説を立てた。まず一点目は丁子紋の分布についてである。昨年度、今年度とジオパーク事業の発表会・調査に参加する中で家紋についての話題になった際、いずれの会でも「丁子紋」について語られた。紋の意匠が家紋として採用される際、見た目の美しさで選ばれる場合の他、その紋の元になった器物や植物が持つ文化的・社会的・宗教的意味が考慮される場合が多い。「丁子紋」は全国的に見てさほど使用家が多い紋ではないため、雲仙の紋の分布には他の地域とは異なる特徴があるのではないかと考えた。次に信仰に関する紋の分布についてである。雲仙・島原地域は修験道やキリスト教が人々の間で信仰されていた歴史がある。日本において信仰の対象は神や仏だけではない。自然も十分に信仰の対象となりえるもので、家紋にはそのような、自然に関するものも存在する。火山や湧き水の恩恵を受けてきた地域でもあるため、火山や水に関する紋があるのではないかと考えた。

以上のような理由から、家紋を調査することで、雲仙・島原の紋の分布には他の地域とは異なる特徴がわかるのではないかと、さらにその特徴から本地域の自然観や宗教観を読み解いていけるのではないかと考

⁹ 雲仙プラン100の概要については以下の記事を参考にした。

「雲仙プラン100要約版」https://www.env.go.jp/park/unzen/data/unezen_20170306_02.pdf 2019/1/6 閲覧

「雲仙プラン100推進体制について」

https://www.env.go.jp/park/unzen/data/unezen_20170306_03.pdf 2019/1/6 閲覧

えた。

・関連する先行研究

関連する先行研究として、主に千鹿野茂氏の研究を紹介する。

千鹿野氏は『都道府県別姓氏家紋大辞典【西日本編】』¹⁰と『日本家紋総鑑』¹¹において長崎県の家紋の分布について言及している。これによると、長崎県における家紋の分布は、「片喰紋」が全体の7パーセント、次に「鷹の羽紋」「木瓜紋」「梅紋」「橘紋」「菱紋」「目結紋」が続く。これらはすべて日本における代表紋であり、分布の上位層だけを見ると、ほかの地域とあまり差はないようだ。しかし、「花菱紋」、「五瓜紋」が多い点や、「クルス紋」「卍紋」がみられる点は、長崎県ならではの特徴であるといえる。またここではほかの地域に比べて、「巴紋」の分布が少ない点についても言及されている。

・データについて

本稿の分析に使用するデータは、著者が2018年12月19日、2019年1月20日に行った雲仙・島原地域での家紋調査のデータである。本研究は「島原ジオパーク研究事業」の一環で行ったものであるため、調査は雲仙市、南島原市の墓地¹²を対象とした。ただし、より普遍的なデータを取るため、民家の裏や敷地内にある墓地は対象外とした。また広範囲に及ぶ調査になるため移動手段として車を使用した結果、車で近くまで行ける場所・車が停められる場所と調査できる範囲が狭まってしまった。私人の所有物であることを配慮し、写真は撮影せずに、家紋名と苗字をメモするだけにとどめた。今後の本格的な調査のための基礎情報として現在分析を進めているところである。

調査の結果、417基の墓石から家紋のデータを得ることができた。以下に挙げる表1～3を用いて調査結果を述べる。表1は412基の墓石に刻まれていた家紋を、使用数が多い順に並べたものである。表2は表1のデータから、家紋のモチーフとして使用されている形を、表3は家紋の外郭として使用されている形を使用数順に並べたものである。

表1を見ると、「剣片喰紋」「九枚笹紋」「梅鉢紋」「違い鷹の羽紋」が続いていることがわかる。これらは前述の千鹿野氏の研究の通り、全国的に使用家の多い紋で、日本の代表紋にあたるものであり、上位5つの紋だけで全体の半分を占めている。この地域の特徴がみられたのは6位以降であった。「花菱紋」は長崎県ではよく用いられる紋である。注目すべきは16位以降から現れる「丁子紋」や「茶の実紋」だろう。図1のno. 16やno. 17を見るとわかるように、「丁子紋」はまるで大根のような見た目をしている。実際は香辛料の丁子（クローブ）をモチーフにした家紋であり、九州に多く分布していることが明らかにされている。¹³平安時代の初期には大陸から日本にもたらされていたというが、その初めは明らかではない。江戸時代には食用だけではなく、刀の錆止めや薬、香料として広く利用されていた。江戸時代に長崎を介して国内に流入したとの特別な記述はないが、この紋が大陸からもたらされた香辛料をモチーフにしていることや、九州に多く分布していることを考えると、貿易や流通経済関係の観点から、長崎県を基軸にさらに掘り下げていける家紋であると考ええる。

図1のno. 13とno. 23を比較するとわかるように、「橘紋」と「茶の実紋」は非常によく似ている。その名の通り橘はミカンなどの柑橘類、茶の実はお茶の実をモチーフにした家紋である。全国的に多いのは

¹⁰ 千鹿野茂『都道府県別姓氏家紋大辞典【西日本編】』柏書房、2004年。

¹¹ 千鹿野茂『日本家紋総鑑』角川書店、1993年。

¹² 雲仙市：瑞穂町西郷一か所、国見町神代二か所、小浜町南木指一か所、千々石町庚二か所、南島原市：布津町三か所、北有馬一か所の計十か所の墓石を調査した。

¹³ 「丁子紋」の分布については以下の文献を参考にした。高澤等『家紋の事典』東京堂出版、2008年。
沼田頼輔『日本紋章学』新人物往来社、1972年。

表1 雲仙・島原地域家紋分布

	家紋名	数		家紋名	数		家紋名	数
1	丸に剣片喰	60	31	井桁に五瓜に剣片喰	2	61	五七の桐	1
2	五瓜に剣片喰	42	32	亀甲に木の字	2	62	七宝に四つ割り菱	1
3	丸に九枚笹	41	33	亀甲違い茶の実	2	63	隅立て角に梅鉢	1
4	丸に梅鉢	34	34	下り藤	2	64	隅立て角に剣片喰	1
5	丸に違い鷹の羽	17	35	源氏車	2	65	抱き花杏葉	1
6	丸に剣花菱	13	36	源氏輪に源氏車	2	66	繋ぎ隅立て四つ目	1
7	五瓜に花菱	11	37	剣花菱	2	67	二重丸に剣片喰	1
8	丸に隅立て四つ目	10	38	五瓜に梅鉢	2	68	上り藤に茶の実	1
9	五瓜に木の字	9	39	五瓜に剣花角	2	69	上り藤に四つ菱	1
10	丸に桔梗	9	40	五瓜に橘	2	70	丸に揚羽蝶	1
11	丸に木瓜	8	41	丸に釘抜	2	71	丸に酢漿草	1
12	五瓜に重ね三階菱	7	42	中輪に抱き沢瀉	2	72	丸に下り藤に九曜	1
13	丸に橘	7	43	丸に繋ぎ隅立て四つ目	2	73	丸に五瓜に木瓜	1
14	亀甲に一文字	6	44	丸に三つ扇	2	74	丸に五三の桐	1
15	五瓜に九枚笹	6	45	丸に三つ巴	2	75	丸に五つ丁子	1
16	五瓜に違い丁子	6	46	丸に結び四つ目	2	76	丸に三階松	1
17	五瓜に丁子巴	6	47	木瓜に木の字	2	77	丸に抱き花杏葉	1
18	丸に立葵	6	48	井桁に梅	1	78	丸に違い丁子	1
19	丸に薦	6	49	井桁に薦	1	79	丸に撫子	1
20	五瓜に唐花	4	50	井桁に丸に梅鉢	1	80	丸に上り藤	1
21	二重丸違い茶の実	4	51	扇	1	81	丸に上り藤に違い鷹羽	1
22	丸に笹竜胆	4	52	鍔酢漿草	1	82	丸に花菱	1
23	丸に茶の実	4	53	亀甲に一つ引	1	83	丸に林の字	1
24	梅鉢	3	54	九曜	1	84	丸に松皮菱	1
25	桔梗	3	55	五瓜に岩の角字	1	85	丸に三つ石	1
26	五瓜に違い鷹の羽	3	56	五瓜に梅	1	86	丸に三つ土佐柏	1
27	丸に五瓜に唐花	3	57	五瓜に桔梗	1	87	丸に山に霞	1
28	丸に二つ引	3	58	五瓜に違い茶の実	1	88	木瓜	1
29	丸に抱き茗荷	3	59	五瓜に薦	1	89	木瓜に花角	1
30	丸に平四つ目	3	60	五瓜に三つ目菱	1			

表2 家紋モチーフ

	家紋名	数		家紋名	数		家紋名	数
1	酢漿草	108	13	薦	8	25	杏葉	2
2	笹	47	14	唐花	7	26	桐	2
3	梅	43	15	文字	7	27	釘抜	2
4	菱・花菱	37	16	立葵	6	28	巴	2
5	鷹の羽	21	17	源氏車	4	29	星	2
6	目結	18	18	引両	4	30	石	1
7	木の字	14	19	竜胆	4	31	柏	1
8	丁子	14	20	扇	3	32	蝶	1
9	桔梗	13	21	花角	3	33	撫子	1
10	茶の実	12	22	藤	3	34	松	1
11	木瓜	10	23	茗荷	3	35	松皮菱	1
12	橘	9	24	沢瀉	2	36	山	1

表3 外殻モチーフ

	外郭名	数		外郭名	数
1	丸	261	7	木瓜輪	3
2	五瓜輪	106	8	上がり藤	2
3	外郭なし	19	9	井桁	2
4	亀甲	11	10	源氏輪	2
5	井桁	5	11	七宝	1
6	二重丸	5			


























































































									
1.丸に剣片喰 60戸	2.五瓜に剣片喰 42戸	3.丸に九枚笹 41戸	4.丸に梅鉢 34戸	5.丸に違い鷹の 羽 17戸	6.丸に剣花菱 13戸	7.五瓜に花菱 11戸	8.丸に隅立て四 つ目 10戸	9.五瓜に木の字 9戸	10.丸に桔梗 9戸
									
11.丸に木瓜 8戸	12.五瓜に重ね三 階菱 7戸	13.丸に橘 7戸	14.亀甲に一文字 6戸	15.五瓜に九枚笹 6戸	16.五瓜に違い丁 子 6戸	17.五瓜に丁子巴 6戸	18.丸に立葵 6戸	19.丸に蔦 6戸	20.五瓜に唐花 4戸
									
21.二重丸に違い 茶の実 4戸	22.丸に笹竜胆 4戸	23.丸に茶の実 4戸	24.梅鉢 3戸	25.桔梗 3戸	26.五瓜に違い鷹 の羽 3戸	27.丸に五瓜に唐 花 3戸	28.丸に二つ引 3戸	29.丸に抱き茗荷 3戸	30.丸に平四つ目 3戸
									
31.井桁に五瓜に 剣片喰 2戸	32.亀甲に木の字 2戸	33.亀甲に違い茶 の実 2戸	34.下がり藤 2戸	35.源氏車 2戸	36.源氏輪に源氏 車 2戸	37.剣花菱 2戸	38.五瓜に梅鉢 2戸	39.五瓜に剣花角 2戸	40.五瓜に橘 2戸
									
41.丸に釘抜 2戸	42.中輪に抱き沢 瀉 2戸	43.丸に繋ぎ隅立 て四つ目 2戸	44.丸に三つ扇 2戸	45.丸に三つ巴 2戸	46.丸に結び四つ 目 2戸	47.木瓜に木の字 2戸	48.井桁に梅 以下1戸	49.井桁に蔦	50.井桁に丸に 梅鉢
									
51.扇	52.銀片喰	53.亀甲に一つ引	54.九曜	55.五瓜に岩の角 字	56.五瓜に梅	57.五瓜に桔梗	58.五瓜に違い茶 の実	59.五瓜に蔦	60.五瓜に三つ目 菱
									
61.五七の桐	62.七宝に四つ割 り菱	63.隅立て角に梅 鉢	64.隅立て角に剣 片喰	65.抱き花杏葉	66.繋ぎ隅立て四 つ目	67.二重丸に剣片 喰	68.上がり藤に茶 の実	69.上がり藤に四 つ菱	70.丸に揚羽蝶
									
71.丸に片喰	72.丸に下がり藤 に九曜	73.丸に五瓜に木 瓜	74.丸に五三の桐	75.丸に五つ丁子	76.丸に三階松	77.丸に抱き花杏 葉	78.丸に違い丁子	79.丸に撫子	80.丸に上がり藤
									
81.丸に上り藤に 違い鷹の羽	82.丸に花菱	83.丸に林の字	84.丸に松皮菱	85.丸に三つ石	86.丸に三つ土佐 柏	87.丸に山に霞	88.木瓜	89.木瓜に花角	

図1 表1にあたる家紋図¹⁴

「橘紋」であるが、表2の通り今回の調査では「茶の実紋」がわずかながら「橘紋」を上回っていた。この紋については、形の面白さから広く使われたことや、茶道の愛好家から用いられていたことが一般に知られているが、この地域に関しては一帯に広がっていた茶畑の影響が考えられる。また、表3の結果から家紋の外郭として、「丸」の次に「五瓜輪」が使用されていることがわかる。「丸」や「井桁」、「亀甲」などは家紋の外郭として全国的に広く使用されている形だが、「五瓜輪」はそれらほど主流ではない。今回の調査ではその理由について言及することはできなかったが、地域ならではの特徴を持つものとしてさらに掘り下げていける紋であると考え。さらに表2から「木の字紋」の占有率が高いことも分かる。この紋は特に千々石町で多く見受けられた。千々石町がもつ歴史背景と、「木の字紋」の形には深く関わりがあると思われるが、それを明らかにするためにはさらなる現地調査と、郷土史などの文献資料の調査が必要であると考え。

・まとめ

当初著者は、雲仙地域が持つ歴史から、修験道や自然に対する信仰に関する家紋が多く分布しているのではないかと予想していた。しかし、今回の調査では予想に反し、「山に霞紋」や「巴紋」はごくわずかしか見られなかった。また島原半島と聞くと、近年世界文化遺産に登録が決定したことから「潜伏キリシタン」など、キリスト教関連の話題を思い浮かべがちだが、今回の家紋調査においては「クルス紋」や「祇園守紋」などのキリスト教、特に十字架に関連する家紋の分布は見られなかった。

しかし、「茶の実紋」の例のように、その地域特有の紋が残っていたことは一つの収穫であった。また「丁子紋」の分布や、「五瓜輪」の使用、「木の字紋」についてなど新たに掘り下げていくべき課題が見つけられたこともうれしい収穫である。

次年度以降は今回の調査で明らかになったことをもとに、さらに掘り下げ疑問を解明するとともに、雲仙・島原の人々の自然観や宗教観を明らかにしていきたい。

¹⁴ 図版引用元

「みんなの知識 ちょっと便利帳」<https://www.benricho.org/kamon/> 2019/1/21閲覧
7, 9, 12, 16, 17, 21, 31, 32, 33, 36, 39, 43, 47, 48, 50, 53, 55, 56, 57, 58, 62, 63, 64, 66, 67, 68, 69, 72, 73, 75, 81, 83, 87, 89 (表中網掛けしているもの) は著者作成

第2部 ドイステープ・パイ国立公園の山岳信仰

Peemmaphat BUARAPHA

ウエイン・チェット・リン：ドイステープの由来

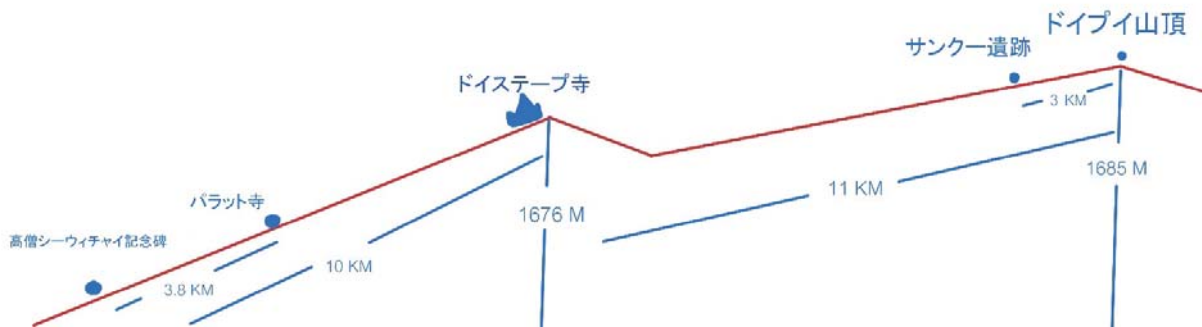


図1 この研究に取り上げた重要な場所 (著者作成)

スラポル (2014)¹⁵によれば、ドイステープが二つの壁で囲まれ、丸い形の城市として、創建された。ドイステープの意味は、丸いかたちの城市に周囲の山岳から7つの湧水が流れ込む地勢の姿をとって「七つの雨どい」である。ウエイン・チェット・リンの歴史と由来について信頼できる記録は二つの記録が残る。一つはチェンマイの都が設立された前から存在していたと述べた。後にランナー王国になる、ハリブンチャイの都とランプーンの都を創建したのはワリーステープという隠者だった。ワリーステープ隠者¹⁶がタイ族とラワ族の居場所を作りたいため、「チェタブリー」という都を設立した。その後チェタブリーの名前はウエイン・チェット・リンに変わった。もう一つの記録はウエイン・チェット・リンが設立された時期はチェンマイ王国が設立された後と述べた。1986年スラポルは元のウエイン・チェット・リンの地域で発掘を行った。城市の壁内に多く仏僧や遺跡を発見した。その仏僧や遺跡はハリブンチャイ時代 (11世紀—12世紀) に造られたと分析した。したがって、ウエイン・チェット・リンはチェンマイ王国成立前に設立され、人口は80,000人くらいいたという結論が出た。



図2 衛星写真による元のウエイン・チェット・リンの地域

出典：Google (n.d.) [Google Maps of Doi Sthep Area]. Retrived March 1, 2019, from <http://goo.gl/maps/MXuwwu5THht>

¹⁵ Surapol Damrikul, "San-Ku Archaeological Site, Doi Pui Hill: Sacred Site of Wasuthep Hermit". *Journal of Fine Art*, Vol 5 No 1, January - June 2014

¹⁶ 2011年版タイ王立協会辞典は「ルーシー (リシ) (隠者)」という言葉に「自宅から出て、修行する者。仏暦前に存在した」と定義している。仏教の聖人に限らない。

ドイステープ・プイ国立公園内の一古い遺跡はドイプイ山頂の近くのサンクー遺跡である。サンクーの遺跡は精舎や仏塔の土台の跡である。山の上に精舎や仏塔を設立する習慣はタイの北部しかない。北部方面の山の上に精舎や仏塔を設立した場所は66か所がある。山の上に仏塔を設立する理由はタイ北部の人々にとって山が神聖な場所と信じられているためだ。

『ムラサッサナー』というラーンナーの仏教伝説集には、ラーワ人はワリーステップ隠者に仕えた獣達の足跡から誕生したという伝承信仰があるので、ラーワ人が住んでいる町のウエイン・チェット・リンもワリーステップ隠者との関係があるはずとスラポールは述べている。ドイステープの名前もワリーステップ隠者に由来する。したがって、サンクーはワリーステップ隠者が留まり、修行した場所とも考えられる。1386年、仏舎利がドイステープに安置される以前、サンクーはドイステープ地方の最も神聖場所と言われていた。

ラワ族

上記のようにウエイン・チェット・リン、あるいは現代のドイステープ地域の先住はラワ族だ。したがって、ドイステープ・プイの信仰について、深く理解するためにはラワ人の信仰をについて解明することが必要であると考えられる。

シリシャイとクリエンクライ (2016) ¹⁷によれば、チェンマイ県、メイチャム市、ムードローン村でラワ族の伝統的な家を研究した。彼らはティン・ラットカノック (1969) ¹⁸によるチェンマイ県ボールアンにあるラワ族の村落調査を先行研究として取り上げた。ボールアンのラワ族村落では二つの精霊がラワ族の守護霊として信じられている。村を守る精霊「ピーノック」や家を守る精霊「ピーナイ」である。家を守る精霊はもっと細かく分けられる。例えば、家族を守る精霊、土地を守る精霊、子供を守る精霊など。しかし、現在のボールアンにおけるラワ族の信仰はラワ伝統の精霊信仰から仏教に変わりつつあるという。

過去にボールアン村には二つの大切な指導者の役があった。一つは村長、ラワ語で「ターピー」と呼んだ。村長の役以外、ターピーは行政村長の役だけではなく、精神的指導者の役も持つ。もう一つは「サマン」という役であった。サマンはラワの祖先に由来する血統を持つと信じられ、村の土地や農業を呪術的に指導する役を持つ。しかし、1981年タイの政府が新たに「地域指導者」という村落指導者を設ける政策を実施したことにより、「サマン」の役がなくなった。その代り、各村に行政村長が任命され、精神的指導者であるターピーと一緒に村を指導する。

シリシャイとクリエンクライが研究したラワ族の村、ムードローン村の各家庭は精霊に守られているという。精霊は家の柱に住むと信じられている。例えば、階段に住むラーチャックやベランダの柱に住むトゥッククアンなど。

上記の研究により、ラワ族の生活や生育地が精霊信仰の大きな影響を与えられてきたことが明らかになっている。

ドイステープの歴史や伝説

タイ政府の芸術局 (1972) ¹⁹によれば、三つの史料がドイステープで保持されてきた仏舎利について書いている。一つ目はラーンナー王朝時代 (クーナー王) (1355年-1385年) に記録した『ヨノック』年代

¹⁷ Sirichai Roitieng, Kriangkrai Kerd Siri (2016), "Lavue Ethnic's Traditional Dwelling House: Ban Muedluang, Mae-Cham, Chiang-mai", International Conference on Research and Design in Architecture and Related Fields 2016

¹⁸ Thin Ratkanok (1969). "A history and Sociology research about Boluang Lawa tribe village". History department, Faculty off Humanities, Chiangmai University, 1969, pp.9-10

¹⁹ The Fine Arts Department, *the History of Doi-Suthep Temple*. Chiang Mai, Thailand. Published in the occasion of Kathin Ceremony at Doi-Suthep temple, 1972.

記である。当時、スマナテーラ僧侶はスコタイ県、スリーサッチャナーライ市から仏舎利を手に入れた。クーナー王はスマナテーラ僧侶がランナーに仏舎利を持ってくるのを依頼した。ランナーへの旅の途中、仏舎利が光り輝き、二つに割れた。クーナー王はブッパラーム寺（現在のスワンドック寺）で一つの部分を保存した。もう一つの部分のふさわしい安置する場所を探すため、仏舎利を象に乗せ、象を自由に走らせた。ランナーの占い方法の一つとして考えられたものである。その象はウチュパチャバンポット山（現在のドイステープ）の麓で一回止まり、山頂まで登った。従った、クーナー王はそこで仏舎利を安置するための仏塔を設立した。

二つ目の史料は『ジンカマライ』というチェンマイの年代記である。書いているものは超自然的な物語がなく「ブッパラーム寺」で仏舎利を保存したことだけの記述であった。

最後は1942年タイ政府の芸術局の出版したドイステープの伝説である。その伝説には象が仏舎利を安置する場所を占う部分が追加されていた。象が山の頂に着いたところ、三回鳴き声を発し、三回時計回りに歩いて曲がり、跪いた。三回時計回りをするのは「ブラパータクシン」と呼び、仏教にとって非常に神聖と考えられた。それをみるとクーナー王が直ぐにそこに仏塔を設立した。



図4 ドイステープにあるパヤーコチャワラモンコル象の像（著者撮影）

筆者はドイステープへのフィールドワークを行い、伝説に登場した「パヤーコチャワラモンコル」という占い象の像を見つけた。象の全体は真っ白である。タイ人にとって真っ白の象は縁起が良いと考えられている。象の後ろにはドイステープの伝説が記録された石碑がある。内容は仏舎利を白象に乗せた後、その象はドイステープの麓まで歩き、三回鳴き声を出した。それから真っ白な象がドイステープまで進み、三回反時計回りし、跪いた。クーナー王が大喜びし、象から仏舎利を降ろした。その後その象が西にドイステープから西に降りて、亡くなった。

プーサエヤーサエの伝説

ドイステープに関する伝説はもう一つがあり、「プーサエヤーサエ（サエじいさんサエばあさん）」という伝説である。アサ・クムパー（2012）²⁰によって、プーサエヤーサエの伝説は様々な古い記事に現れる。例えばチェンマイ年代記、チェンマイパンダーム伝説、ナンターラーム寺の伝説など。伝説の内容は次のとおりである。

プーサエ（サエじいさん）とヤーサエ（サエばあさん）はラワ族の祖先の獐猛なヤシャであった。ある時、プーサエとヤーサエが仏様と対戦して負けた。五戒律を授けて、もう生き物を殺さないと約束した。

²⁰ Asa Kumpha (2012). "Pu Sae Ya Sae with the Ritual of Spirit Worship of Chiang Mai". *Suranaree Journal of Science and Technology* Vol.6 No.2, p.99-122

だが、プーサエとヤーサエが元ヤシャのため、ヤシャの本能的に水牛を食べるという例外を仏様に依頼した。この依頼は現在のメーヒア区、チェンマイ県の「リエンドン」という習慣になった。毎年、タイの旧暦の9月白分14日に行い、プーサエとヤーサエの霊媒が生の水牛肉を食べ、礼拝所に仏様の絵が描いている布掛物が仏様の代表として掛ける。

ランナーの信仰ではプーサエとヤーサエは「チェンバンチェンムアン」という守護霊として参拝する。役割は都門、都門の角、広場、僧、木、山を守る。プーサエとヤーサエはチェンマイ都の大切な護霊の先祖の「ガオピー」と言われた。プーサエとヤーサエの子供は32人まであった。一人の子供はチェタブリー（元のウエイン・チェット・リン）の都を設立したワリーステップ隠者であり、もう一人が「クンルアンウィランカ」というドイステープ地域のラワ族長であると言われた。

アサによれば東南アジア地方はプーサエヤーサエのような、仏様が幻獣を征伐した伝説が多くある。例えば、ナーガを征伐したという「ウランカタート伝説」、シーサンパンナのプラタットチョムトングの「アラワガダソー伝説」など。アラワガダソーは人間を食うヤクシャであり、仏様の説教を聞き、仏教の信者になった。しかし、もしアラワガダソーは三か月間仏日の太鼓を聞かないと、もう一度人間を食べるようになる。アサによればこれらの伝説はシーサンパンナ、ランナー、ランサーンに仏教を広めた物語の「プラチャオリエブローク伝説」と繋がるという。タイ北部各地方の民族は仏教を受容するが、仏教化に抵抗したことがない訳ではない。アラワガダソーがもう一度人間を食べる可能性があることやプーサエとヤーサエが自分の習慣の通りまだ水牛を食べることは仏教に対する抵抗を表すといわれる。

ランナーの伝統的な信仰とドイステープ寺：モム像

ドイステープの信仰はランナーの伝統的な信仰から影響を受けた。筆者がドイステープでフィールドワークを行った際、ある像を見つけた。看板には「モム」と書いてある。ナッタカーン(2013)²¹によれば、モムはランナーの民話に現れる諸獣であり、タイ北部の寺にだけ存在する。モムの特徴は体の半分は猿、半分は虎であり、腕が長い、体が黒い。

モムの像の形は四つの種類に分けられる。建物の入り口を守る形、円になって自分の尻尾を追いかける形、ミャンマーのシンハーと似ている形やお寺の棟梁と柱などにいる形。ドイステープの場合は建物の入り口を守る形である。仏教の習慣により寺の入り口を守るのはナーガの役だが、モムとナーガは互いに仲が悪いので、一緒に立てることが禁止されている。

モムはランナーの人々の生活にいろいろな形でとりいれられてきた。例えば雨乞いパレード、お守りとしてモムの絵を入れ墨するなどである。



図4 ドイステープでのモム像（著者撮影）

²¹ Nutakarn Treerabavornrakul, "Influence of Lanna Folklores on Sculpture of Mom in Northern Provinces of Thailand", *Journal of Humanities Naresuan University*, Year 10 Vol.3, September-December 2013

ランナーの伝統的な信仰とドイステープ寺：十二支の未の寺

プラクルーサム・ウオラウイト・パスッコ（2011）²²によると、元のランナー王国、ランサン王国やミャンマー王国のあった地方の12か所の仏舎利塔には十二支の動物が住んでいる。子供が生まれる時各十二の動物がその子の精霊を仏塔に置くという。ふさわしい時間がくると、その子の精霊は父親の額に移動する。7日間たつと、母の子宮に移動する。そして、その子がなくなる時、担当する十二の動物は精霊をとり、死後の世界に渡すのを待ため、また仏塔に安置する。ドイステープ寺の仏塔は羊の住む場所と信じられている。

イラスト素材: <http://all-free-download.com>



図5 十二支の動物が割り当てられたランナー地方の仏塔（著者作成）

現代のチェンマイ人の信仰中心：高僧シーウィチャイ

観光客がドイステープ・プイ国立公園に訪問する目的はだいたい二つある。一つはドイステープ寺へ参拝するため。二つ目は高僧シーウィチャイ記念碑を奉拝することためだといわれる。高僧シーウィチャイの存在はドイステープの神聖さを示す一つと考えられている。例えば、ドイステープの上に豪華な裁判官宿舎を建設する計画が発表された時、反発していた地元住民らに取り上げた理由の一つは高僧シーウィチャイへの冒とくになることであった。²³

ソパー・チャナムル（1991）²⁴によれば、チェンマイ県民は高僧シーウィチャイ（1878–1938年）のことを「トンブン（聖者）」として見なしている。「トンブン」は僧に対して地元民が呼ぶ尊称である。トン

²² Phrakhrusamu Worravit Phasukko (dutsadeephuttipun) 2011, "THE BELIEF AND THE METHOD OF PRACTICE CONCERNING THE RELICS FOR THE YEAR OF BIRTH FOR THE BUDDHISTS IN PRAE PROVINCE", Graduate School Mahachulalongkornrajavidyalaya University, master thesis, 2011.

²³ "Citizen pray to Doi-suthep and Kruba in order to win back the sacred mountain" 2018, August 25, *Komchadluek News*. Retrieved from : <http://www.komchadluek.net/news/regional/340780>

²⁴ Sopha Chanamul, "Krubha Srivichai "Tonbun" of Lanna (1878-1936 C.E.)" MA Thesis, History Division, Thammasat University, 1991.

ブンと呼ばれる僧は前世で功德を多く積み、人類を救う。これは「5000年ごとに、仏教が衰退する。その時ある菩薩が人類を救う」とする仏教信仰と似ている。プラ・ソムチャイ・タムマソー (2012)²⁵はトンブンの特質について、人々によりトンブンとして認められるため特別の力を持つことを表し、現世の人々をたすけなければならないと述べた。これは仏教の「菩薩 (ボーディ・サットヴァ)」の信仰と似ているといわれる。

片岡樹 (2015)²⁶は Cohen (2001) と Bowie (2014) の理論を取り上げ、トンブンの信仰がユアン仏教 (ユアン派) から由来することを指摘した。片岡はさらにユアン仏教は上座教の一派であり、現在のタイ国北部から、ミャンマーのシャン州や中国雲南のタイ族地区などに広がったと述べた。しかし、ピシット・ナーシー (2015)²⁷の意見が異なっている。ピシットによればタイの北部には多数の細かい仏教派があり、ユアン派から来るだけではなく、チェンマイ派からの由来もある。トンブン信仰が同じユアン仏教派からと考えれば、タイ国北部からミャンマーのシャン州や中国雲南のタイ族地区に広がる地域で同じトンブンを信じていることが理解しやすいとも考えられる。さらにピシットは、高僧シーウィチャイがラーンナー仏教の模範になり、多数の仏教派が彼の基準を受け取り、後世代の中には高僧が高僧シーウィチャイの生まれ変わりと見なされている僧もいるという。

ナタポン・ドゥアンカエウ (2016)²⁸によれば、トンブンとして高僧シーウィチャイの生まれ変わりと見なされている僧がブンチュム師やトゥアン師である。高僧シーウィチャイを元にして誕生した宗派が「新クルーパー (高僧) 派」と呼ぶ。新クルーパー派の特徴は、高僧シーウィチャイのような服装を着、地域を発展させなければならない。この新クルーパー派はタイ北部で支持を広げ、タイ北部の方言で「クルーパーが生まれ変わった」という言葉が誕生した。

プラ・ソムチャイ・タムマソーによれば、高僧シーウィチャイがトンブンとして認められた主な理由は二件である。一つ目は仏教の習慣を真面目に守る。例えば、26歳から高僧シーウィチャイは肉を食べるのをやめ、野菜しか食べなかった。タバコを吸うやキンマ (東南アジアに流行っていた噛む嗜好品) を噛むのような当時にとって当たり前のこともしない。彼のようにできると魔法の力を持つようになるという



図6 ドイステープの麓にある高僧シーウィチャイ記念碑 (著者撮影)

²⁵ PhraSomchai Dhammaso (Promma), "A study of The Roles Played by Pragruba Sirivichai Sirivijayo As a Saint in Lanna, A case study of the renovation Monasteries in Lanna", MA Thesis, Mahachulalongkornrajavidyalaya University, 2012.

²⁶ 片岡樹「山地からみたブンチュム崇拝現象」『東南アジア研究』第53巻第1号、2015年7月

²⁷ Pisit Nasee. Studying "Kruha": "Kruha Study" a discussion regarding belief, way and practice of "Kruha" in Lanna Buddhism, 2015.

²⁸ Nattapong Duangkaew, "Satu...Jao Tonbun Pik Ma Gerd (Tonbun had reincarnated): the birth of new Kruha school", ASEAN: Siam-Thailand + Japan + China and + India conference 2016, Payao University, Payao province, 25 November 2016, The Foundation for the Promotion of Social Sciences and Humanities Textbooks Project and Toyota Thailand Foundation, 2016.

話も広がった。ピシットによれば、高僧シーウィチャイの習慣は仏教の三蔵から学ぶのではなく、実行することから学ぶ。この習慣は仏教で「業処」とよばれる。高僧シーウィチャイが業処を実行する前に迷信について勉強したという話もある。高僧シーウィチャイがトンブンとして認められた二つ目はランナーの仏教を発展させたことだといわれる。高僧シーウィチャイは森での瞑想修行したことがあり、山地民のあいだに信者を獲得した。その後山地民や他の信者の力を借りて、各地で多数寺院や仏塔を修復や再建した。一番よく知られているのは信者の労働奉仕や献金を受け、活動はドイステープの参道を整備したことである。プラ・ソムチャイ・タムマソーにより、彼が各地の寺院や仏塔を修復や再建する前に、その場の完成した姿を予見する力を持っていたと信じられた。シーウィチャイはまたタイ語版の仏教の三蔵をランナー語版に訳した。

まとめ

ドイステープ地域はもともと「ウエイン・チェット・リン」というラワ族の住んでいる地域であった。そのため、もともとの宗教はアニミズムに基づく山岳信仰である。ラワ族の伝統的な信仰は例えば、プーサェヤーサェというヤシャ伝説に繋がる、霊媒が生の水牛肉を食べる「リエンドン」という習慣、ラワ族村を守る精霊「ピーノック」「ピーナイ」、ラワ族村落の二つの大切な指導者「ターピー」と「サマン」の存在などである。政治や仏教をめぐる闘いも、伝説や民族の生活の変化などに表れていると思われる。例えばプーサェとヤーサェがまだ水牛を食べることは仏教に対する抵抗を表すこと、タイの政府が「地域指導者」という政策を導入したことにより、「サマン」の役がなくなったこと、高僧シーウィチャイがタイ中央政府と闘い、ランナーの高僧として尊敬されたこと、ドイステープの上に豪華裁判官宿舎を建設する計画が発表された時、反発していた地元住民らを取り上げた理由の一つは高僧シーウィチャイへの冒とくになることなど。さらにドイステープの信仰は他の信仰も混じっている。例えば、ドイステープの十二支の未の寺の信仰はランナーと中国の暦法の共通点と考えられる。ヤシャはヒンドゥー教から由来した。モムという諸獣がヒンドゥー信仰におけるヒマバタ森 (Himavanta) から来るという考えはバラモン教にも存在し、モムもミャンマーのシン (singha) と似ている。

第3部 雲仙における宗教事情——山岳信仰を中心に

出口 智佳子

はじめに

雲仙岳は、平成新山（普賢岳）、国見岳、妙見岳などで構成された標高約1500メートルの活火山である。平成2年、普賢岳の大規模な噴火により平成新山が現れ、平成8年まで活発な活動が続いた。地表から噴出する温泉は古来より有名で、雲仙という地名は元来、「温泉」と表記され、もうもうと上がる熱湯の湯けむりから「地獄」とも表された。本稿では温泉地に根付く、雲仙岳の山岳信仰の歩みと現在の山岳信仰の姿を検討する。

雲仙岳の山岳信仰については、根井浄氏により詳細な研究が進められており、本稿ではまず、雲仙岳の四面神社の由来をはじめ、満明寺を中心として展開された修験道、キリシタン大名有馬晴信による神社仏閣の排斥、キリスト教禁教以降の再興に至る雲仙岳の修験道の歩みを根井氏の研究を基礎²⁹として整理し、最後に、信仰的に深い関わりを持つ佐賀県が多良岳との関わりに言及したい。

雲仙山岳信仰始まりから排斥まで

「お山」の神を崇め修業を積む修験道と日本古来より伝わる神道と外来宗教である仏教は、影響を与え合いながら共存し、明治にいたるまで神仏混淆の世界を形成していた。雲仙における宗教事情も同様で、「お山」に対する土着の信仰（修験）、神道、仏教が、温泉神社（四面神社）や満明寺を中心として人々に受け入れられてきた。

奈良時代初期に編纂された『肥前風土記』において、雲仙岳は「温泉岳」と表記され、「高木津座」という名の「山の神」として記録され、そこから湧き出る温泉が「峰湯泉」として登場している。『古事記』上巻の九州国産の神話の中では「一身四面」の神が九州（筑紫嶋）を鎮護するという。一つの身体で四つの面があり、面毎に名前が付けられ筑紫国は「白日別」、豊国は「豊日別」、肥国は「建日向豊久土比泥別」、熊曾国は「建日別」と記されており、それぞれの土地を護る温泉神社の四柱の神として祀ったと言われる³⁰。また温泉神社は『日本三大実録』において従五位上に叙せられたという記録が残されており、この頃既に九州の有力な神社として朝廷から認められた存在であった。平安初期に成立したという『先代旧事本紀』では、温泉神社の祭神は四柱でなく、「速日別命」、「白日別命」、「豊日別命」、「建日別命」、「建日向豊久土比泥別命」の五神と記録されており、『古事記』における四柱の神との記録とは異なっているが、この五神と対応すると考えられるのが、仏教の本地垂迹説を基とした五智如来の世界観である。

奈良時代に伝わった外来宗教の仏教は、日本古来の在来宗教であった神道と出会い、八百万の神々は仏教の如来が仮の姿として現れたもの（権現）とされ、本地は仏教の神々であるという本地垂迹の思想を経て融合した。雲仙においては、701年、真言宗の僧侶、行基（668－749）によって、温泉山満明寺が開かれたとされる。前掲の『先代旧事本紀』に記述された温泉神社の五神は、仏教の金剛界曼荼羅の五智如来と対応しており、『温泉山鎮将四面大菩薩縁起』によると、大日如来を中心に、東方に「阿闍如来」、南方に「宝生如来」、西方に「阿弥陀如来」、北方に「釈迦如来」を配し、温泉四面大菩薩の本縁としている。

神仏習合により、温泉神社を管理する別当寺として満明寺が開かれると、雲仙岳の山岳信仰は満明寺を中心として一層、修験の地として栄えていくこととなる。満明寺の開創伝承によると、一時は小浜町の付

²⁹ 根井氏の雲仙岳に関連する著書および論考は、次の通りである。『修験道とキリシタン』東京堂出版、1988年、「温泉山信仰と島原修験」『山岳宗教史研究叢書』3号、日本山岳修験学会、1979年、「雲仙岳の歴史と文化」『山岳修験』第30号島原半島特集、日本山岳修験学会、2002年等。

³⁰ 『島原の歴史藩制編・自治制編』島原市、1972年、1～14頁参考。

近に僧侶の居が300坊、雲仙のおしどり鴛鴦の池付近に700坊、仏塔は40塔以上あったとされるが、キリシタン大名となった有馬晴信の寺社破壊によって雲仙の山岳信仰の姿は大きく変化する。

有馬氏の政策と寺社破壊

キリシタン大名として知られる有馬晴信（1567－1612）は、佐賀の龍造寺隆信の脅威から逃れるべく、キリスト教と共に西欧技術と文化を受容し、武力と財力を得ることができた。晴信は1580年、14歳の時に洗礼を受け、洗礼名をドン・プロタジオとされ、以降熱心なキリスト教徒となり、教会堂をはじめキリスト教を教えるセミナリオを作るなど、領内のキリスト教化に努め、有馬氏の領内であった雲仙も、この影響を大きく受けることとなる。

キリスト教布教を進めたルイス・フロイスは、『日本史』の中で、殊に修験道を敵対視し、「悪魔に奉仕する」者として修験者（山伏）を捉えていた。晴信の祖父にあたる有馬晴純（1483－1566）は、はじめキリスト教の禁教政策を取っていたが、嫡子有馬義貞（1521－1577）らの勧めから受洗し、ドン・アンデレという洗礼名となった。大名の入信に併せて、領内の有力者が次々と受洗し、それまで大きな勢力を振るっていた仏僧や山伏が強く反対したという。嫡子義貞が早世し、彼を継いだのが有馬晴信であったが、祖父同様はじめはキリスト教への反発があり、キリスト教へ圧力をかけていた。しかし、政治的背景や信仰的理由からキリシタンへと転向した。彼を支えた宣教師らの助言等から、イエス・キリストのみを信仰するという一神教教理を実践し、寺社破壊へといたったとされる。晴信が受洗した1580年に寺社破壊がなされ、その様子はフロイス『日本史』で次のように語られている。

巡察師が滞在した三ヶ月の間に、大小合わせて四十を超える神仏の寺社がことごとく破壊された。それらの中には、日本で著名な、きわめて美しい幾つかの寺院が含まれていた。³¹

温泉と呼ばれ、日本では盛んな巡礼をもって知られる豪華な社殿〔……〕その神殿は有馬の城の上、三里の地にあつて、そこには大いなる硫黄の鉱山がある。神殿や僧院、および神仏像は、ドン・プロタジオ（晴信）の改宗後に破壊されていた。³²

寺社破壊の際、仏僧たちはキリシタンになるよう迫られ、キリスト教に入信するか、領内から退去するかを選ばされた。キリシタンになった仏僧たちは妻帯して仏像を破壊した者もいたという。寺社殿の再興計画を進める薩摩藩島津氏家老の上井覚兼は、破壊後の惨状を「当郡南蛮宗にて、温泉坊中残り無く、破壊に候」と自身の日記に残している³³。

雲仙山岳信仰の再興

満明寺はじめ雲仙の仏教、神道、修験はキリシタンによって寺社破壊・排斥を受けたが、1587年に豊臣秀吉より伴天連追放令が、1612年に徳川家康より禁教令が出され、キリスト教信仰は困難なものとなった。17世紀に入ると長崎では二十六聖人殉教や元和の大殉教など激しいキリスト教への弾圧がなされる。1627年から32年まで、雲仙でもその地形地質を利用した拷問や殉教があり、キリシタン殉教地の1つとなった。1637年の島原・天草一揆で荒廃した島原半島を、徳川家光の命により高力摂津守忠房が整備し、満明寺一

³¹ フロイス『日本史』2巻より。

³² 前掲書より。

³³ 根井浄『修験道とキリシタン』東京堂出版、1988年、182頁参考。

条院を再建、仏教と神道を中心とした山岳信仰が再興され、明治にいたるまで再び神仏混淆の土地として続いた。1872年、明治政府の神仏分離令により神道と仏教が分けられた。奉祀していた修験者（山伏）らも還俗するように通達を受け、現在の温泉神社、満明寺一条院などにいたっている。

雲仙岳は日本初のリゾート地として、初の国立公園として認定を受けるなど現在の第三次産業の先進的なモデルとしての側面が強いが、それは「お山」への信仰と複雑な宗教的背景の歴史の上に立つものであると言える。

おわりに——雲仙岳と多良岳

本稿では、根井氏の先行研究を基礎として雲仙の山岳信仰の成り立ちを、初出文献等をもとに辿り、神仏習合後の姿と有馬氏による迫害の様子を概観した。現在は、観光リゾート地として、国立公園としての観光的側面の強い雲仙であるが、それは、これまで見てきた宗教の歴史的背景を利用しながら形成されていったものであると言える。

また、最後に雲仙岳の山岳信仰と佐賀の多良岳の山岳信仰について言及し、今後の調査に繋げたい。本地垂迹説から、雲仙岳の温泉神社は金剛界曼荼羅の五智如来として位置付けられている。その思想からすると多良岳は、大日如来の慈悲により人の悟りを育む世界とする胎蔵界に位置すると言われる。多良岳には千手院宝円寺や行基が開いた金泉寺があった。金泉寺を中心とする多良岳の修験道は、16世紀頃、キリシタン大名であった大村純忠（1533–1587）によって、寺社破壊の被害を受けた記録が残っている³⁴。雲仙山岳修験の信仰をより理解するために、今後、金剛界と胎蔵界の両界曼荼羅を同時に検討し、胎蔵界として位置づけられる多良岳も併せて調査を進めていきたい。

³⁴ フロイス『日本史』9巻より。